

地域情報（県別）

【東京】開業10年で4院、年間来院12万人の小児科グループが生まれた理由-小暮裕之・有明こどもクリニック理事長に聞く ◆Vol.1

2020年4月3日（金）配信 m3.com地域版

東京湾岸エリアに集中して小児科クリニックを4つ作り、年間12万人の患者が訪れる規模にまでグループを成長させた開業医がいる。在籍するスタッフは約100人、うち医師は約50人。「有明こどもクリニック」理事長の小暮裕之氏はそもそもなぜ、開業したのか。それは、「家族に身近な開業医の方が医療問題の解決に貢献と考えたから」という。どうしたことなのか、聞いた。（2020年2月3日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)

——まずは、運営するクリニックの概要についてお聞かせください。

私が運営している「有明こどもクリニック」は現在、4院あります。2010年に有明院を、16年に豊洲院を、18年に勝どき院を、19年に田町芝浦院を開院しました。標ぼう科目は小児科、内科、アレルギー科などで、有明院を除いて平日は夜の9時まで、また全てのクリニックで土曜日と日曜日も診療しています。在籍するスタッフは約100人で、うち医師は約50人、常勤医は約10人です。全てのクリニックを合わせると、年間で12万人ほどの患者さんにご来院いただいています。



理事長の小暮裕之氏

——小暮理事長は医師8年目に開業しました。なぜ開業をしよう？

乳幼児の死亡率を下げたかったことと、小児救急の負担を減らしたかったことの主に2点が理由に挙げられます。

私が勤務医をしていた当時は、日本における1～4歳児の死亡率が先進国中ワースト2位と非常に高かったんですね。死因の上位を占めていたのが「不慮の事故」と「感染症」の2つだったわけですが、これらはともに開業することで予防の可能性を高められるのではないかと思いました。

まず不慮の事故についてですが、これは半分以上が家庭内で起こっていましたから、ご家族のかかりつけ医としてタイムリーに注意点を伝えていけばいいのではないかと。何かを飲み込んでの窒息は子どもが物に手を伸ばし始める生後5カ月くらいから増えるので、2～4カ月の段階で「トイレトペーパーの芯よりも小さい物が手の届く範囲にあると危ないよ」などと親御さんに伝え、また子どもが立ち上がる9カ月前後からはお風呂で溺れることが増えるので、「目を離さないようにね」と6カ月目や7カ月の健診時に注意喚起する、といったことを実際に開業後に実践しました。

感染症の予防についてもワクチンを輸入すればその可能性を高められると考えました。当時の日本は予防接種の制度が整っておらず、先進国の中では大幅に遅れていました。そこで私は開業後に不活化ポリオワクチンを輸入し、さ

らに海外ではスタンダードだった混合ワクチンを例に6種混合ワクチンを導入、先進国と同等の予防医療が受けられるようにしました。こうした判断と展開はやはり開業医ではないとしばらくのあいだが実際のところだったのです。

——それらに加えて、小児救急の負担を減らしたい思いもあったと。

はい。この思いも勤務医時代からありました。私は当時から亡くなる乳幼児を減らしたいと救急や集中治療の場で研さんを積んでいたわけですが、緊急度が低い救急受診があまりに多いことに大きな問題意識を抱えていました。

印象深いのは2009年から始まった新型インフルエンザの流行です。親御さんは不安だったのでしょう。昼間に受診したものの「熱が続いているから念のために」と夜間救急を利用する方がたくさんいました。ちょうどその時期に、窒息のために心肺停止状態で運ばれてきた赤ちゃんも診ました。救急で感染症のお子さんを診て、集中治療室では窒息で重症になったお子さんを診て…。当時は目の前の子どものため、ご家族のために必死に働いていたわけですが、段々と疑問が深まってきました。「本当にこれが自分のやりたかったことなのだろうか…」と。

冷静に考えてみると、根っこにあるのは地域医療でした。緊急度が低いものの救急を利用してしまうのは、親御さんが正しい知識を持っていないからであり、そのために救急の現場も疲弊していました。そこで、「地域の最前線に立ち、できるだけ多くのご家族に接して事故や感染症の予防に関する情報を提供していこう」と考えたのです。

当グループが前日の午後6時半から予約を受け付けているのは不要な救急受診を減らしたいためです。仮にお子さんの具合が悪かったとしても、翌日の朝に受診できることが分かっていたら親御さんが焦って救急搬送を頼むことが減るのではないかと。

——4つのクリニックが全て東京湾岸エリアにあります。これは医療事情が絡んでいるのでしょうか。

はい。東京湾岸の江東区はこの10年で子育て層を中心に人口が急増していて、生活インフラが追い付いていない状況です。私は勤務医時代、有明で40年ほど働いている親戚から「医療が足りていない」と聞いたことでこちらでの開業を考えました。そして、実際に来てみて驚きました。有明周辺には小児科専門医によるクリニックが全くなく、隣の豊洲と東雲でもそれぞれ2件しかなかったのです。それらのクリニックでは朝に開院してたったの数分で受付が終了してしまうこともあったといいます。

厳密に言えば、江東区の中でも当時の有明は豊洲や東雲に比べてさほど人口は増えていなかったのですが、開業後の収益に一抹の不安もありました。しかしながら小児科専門の開業医が一人もいない地域で私がその第一号になれるのは大変うれしいことだと思い、踏み切った次第です。

◆小暮 裕之（こぐれ・ひろゆき）氏

2003年獨協医科大学卒。総合病院国保旭中央病院などを経て2010年に「有明こどもクリニック有明院」を開業。人口が増える一方で生活インフラが整っていない東京湾岸エリアの医療環境を改善しようと2016年に豊洲院を、2018年に勝どき院を、2019年に田町芝浦院を開院した。全てのクリニックを合わせて年間12万人の患者が来院する。日本小児科学会小児科専門医。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

